



研究の森から

クマノザクラの発見と適切な利用への取り組み



写真1 クマノザクラの花
淡紅色で開花時に葉が伸びない。

クマノザクラの発見

多摩森林科学園では、植栽されている栽培品種や全国の野生のサクラの分類学的な研究を進めています。筆者は、およそ10年前に紀伊半島産の奇妙なサクラの葉の標本を見たことから、紀伊半島に注目するようになりました。

2013年から現地調査を進めたところ、

ろ、ようやく2016年にその奇妙なサクラの自生体を発見することができました。その後、形態や分布域などの調査をおこない、2018年に新種クマノザクラ *Cerasus kumanoensis* T.Katsuki として学名を発表したのです。

クマノザクラの特徴

クマノザクラは、これまでヤマザクラと混同されてきましたが、系統的にはカスミザクラに近縁と考えられます。しかし、クマノザクラはヤマザクラやカスミザクラ、染井吉野、などより早い開花期が特徴です。

自生地の沿岸部では3月中旬に見頃となります。花色は白く淡紅色で、開花期に葉が伸びず、染井吉野と似た美しい色合いです(写真1)。また、ゆるやかに枝を横に広げた樹形は、観賞木として高い価値があります(写真2)。そのため、自生地では、染井吉野に代わる観賞木として利用する動きが始まっています。

自生地での利用の取り組み

すでに三重県では種子から増やしたクマノザクラの苗木が生産され、公園や山への植栽も始まっています(写真3)。しかし、成木まで育てた事例はなく、適切な育成法はだれも知りません。一方、自生地でクマノザクラの母樹は確認できるものの、シカ害や二次林の高齢化のためか、稚樹・若木はほとんど見られません。さらに、染井吉野、ヤオオシマザクラなど外来のサクラ*による悪影響も懸念され、なんらかの保全対策が必要であることもわかってきました。保全を考慮した適切な利用を進めるためには、基礎的な研究が必要です。



写真3 コンテナを用いて育てたクマノザクラの実生苗

研究者の横顔

Q1. なぜ研究者に？

高校時代は山岳部に所属しており、よく山を歩いていました。そのとき、山に生育する樹木のことをもっとよく理解しようと考えたことから研究者をめざしました。



勝木 俊雄

Katsuki Toshio

多摩森林科学園

Q2. 影響を受けた人など

大学の教養学部で、地学の講義や課外ゼミなどで、お世話になった濱田隆士先生です。ちょうどNHKで「地球大紀行」が放送されていた時期で、諮問委員として関わっていた濱田先生に、自然史研究の取り組み方を教わりました。

Q3. いまエキサイティングなこと

本稿でも採り上げたクマノザクラです。新種ということだけではなく、こんなに素晴らしい野生のサクラがあることを、より多くの人に知ってほしいと思います。

Q4. 若い人へ

研究者として研究活動を継続していくことはたいへんです。しかし、自分がほんとうに研究したいことであれば、多少の困難は乗り越えられます。自分にふさわしい研究テーマに出会うことが、もっとも大切であるように感じます。

* 外来のサクラ

もともとその地域での生育はなかったが、人間の活動によって他の地域から入ってきたサクラ。国外からに限らず、国内においても自生地外から入ってきたものは、国内外来種とされる。



写真2 クマノザクラの樹形

樹高は高くても10メートル程度で、ゆるやかに枝を横に広げる。



写真4 熊野さくらの会が植栽したクマノザクラの実生苗

熊野さくらの会

クマノザクラが公表された後、「熊野さくらの会」というNPO法人の代表の方とお会いしました。2002年に設立された団体で、三重県紀宝町でサクラの植林などをおこなっています。クマノザクラとは関係がない団体だったのですが、そっくり重なる名称となってしまう。現在ではクマノザクラの保全に理解をもらい、クマノザクラの自生地でもある紀宝町で、2019年からはクマノザクラを植林するようになっていきます。**写真4**。新しく発見されたこの魅力的なサクラを、地元の方々とともに発見者・研究者として次世代に継承していきたいものです。